江戸名所圖會
二

連ね燈の光ハ玲瓏としく流に映し楼船扁舟所せくともひつき一時に水面を覆ひかくてあたかも陸地に異ならず絃歌鼓吹を耳に満しく囂しく実に大江戸の盛事なり

此人数船なきハ暑きすゞみの那　其角

千人か手を欄干やはしすゞみ　同

このあたり目にみゆるものはみなすゞし　芭蕉

清水如水宅地　横山町に住るといへども水ハ藤根堂と号し狂歌に名あり　常に酒をこのみ酔ざる時ハ志らふくとしく猥に言語を発せず酒を飲る時ハのびくとして勢ひよく志人ひあり淡々乱れくとぞ人名付らく藤根堂と呼なるとなり　按に雄長老卜養又近くハ九州の甚久法師抔各狂奇に名ありて家集もあれと此如水ハ名さへ志る人まれなり　如水一時大和國法隆寺に蔵せる和の賢聖の瓢といへる器物を見て後瓢に彫物をせしめしを得たりしも鈍刀を用ひらく其巧尤絶妙なり依て需多かりけれハ此匏瓜の為に身を押へられたりとの意にて自ら迷淵蟠鯰候とそ名のりたる住家

両國橋

壱両が花火間もなき光かな　其角

本所一ツ目

元柳はし

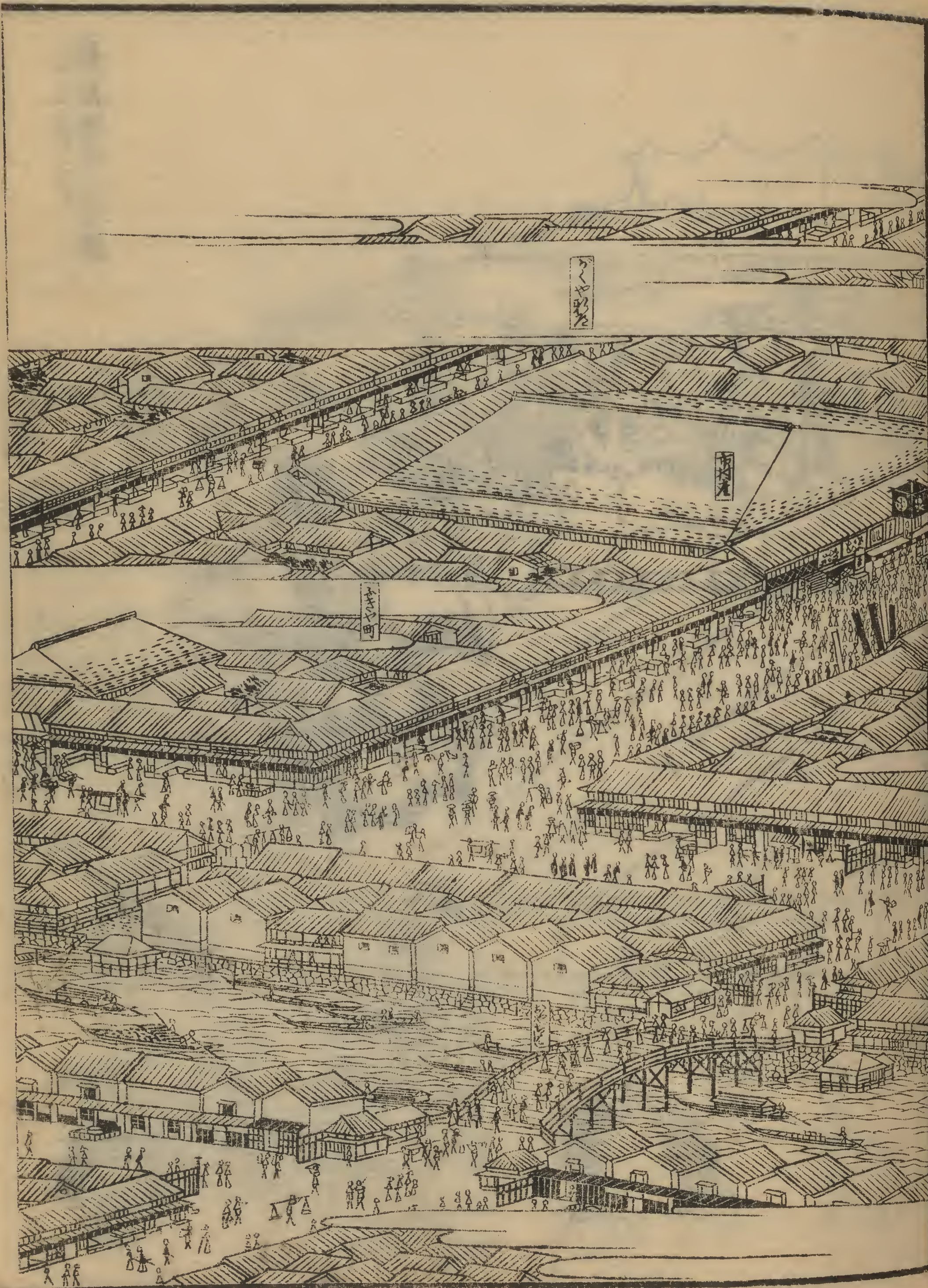
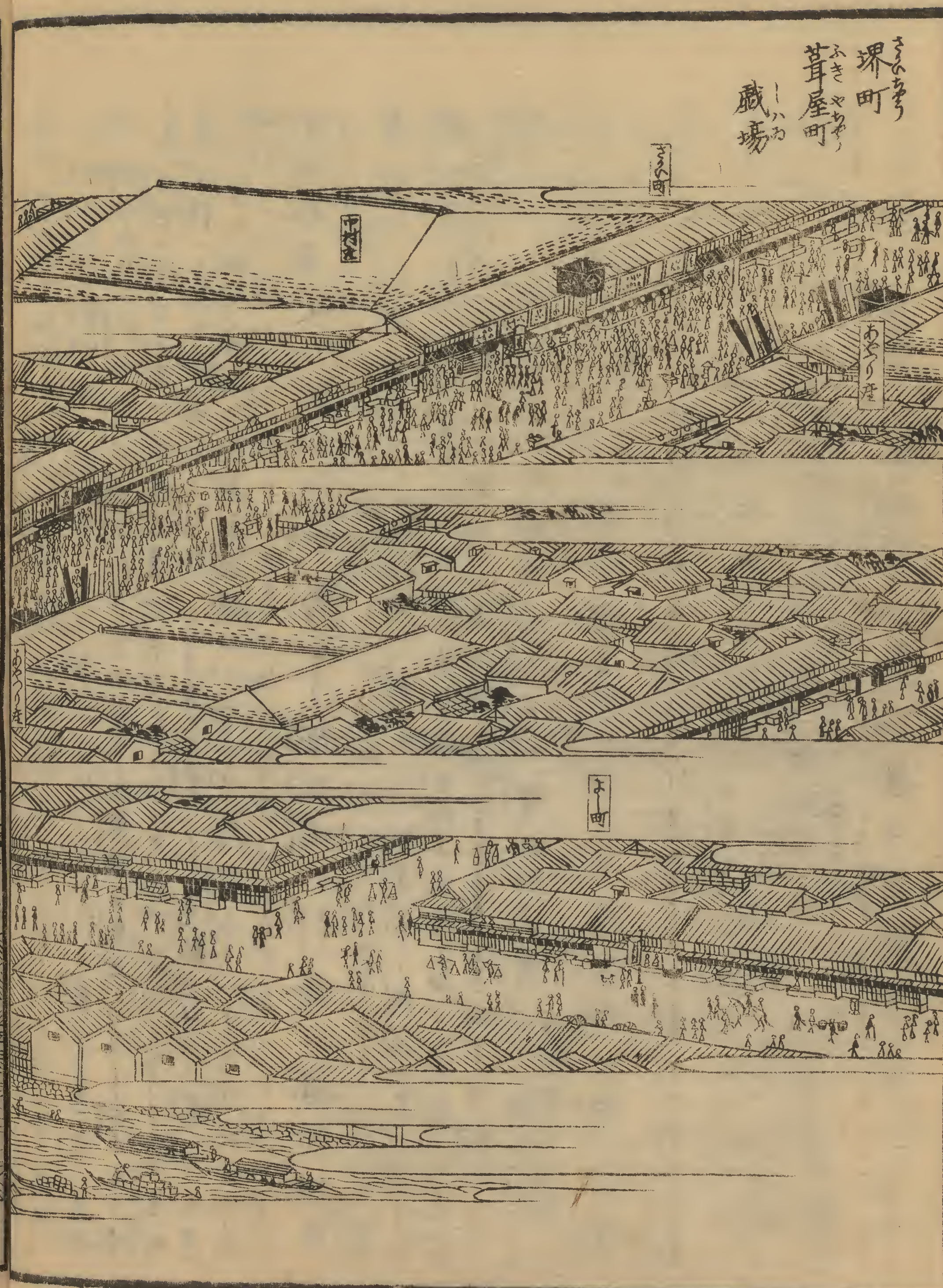
より東ハ薬研堀と云所あり其辺知人の許ハ行て楼上より
遠近を見やりて
いつ頃の世ハ薬なり薬研堀月ハ白湯にてかけハ水にて
又ある時漁父の辞の意をよめる
世をなあり我もとりのミ濁酒酔て復ふてさゝらふの水
享保十三年戊申正月三日朝起て
公事喧嘩地震雷火より後日飢饉なき國へゆく
かくよみて同し五日の暮方剃頭湯あミし太神宮を拝しまゐり
しつかに終をとれり　按ニ行年七十二歳今も浅草金竜寺ニ墓碑あり石を以て瓢の形ニ造立す如幻庵東湖老和尚此如水ヵ臨終の
記をかつをてありと云り　墓碑ニ一陽如睡とあり水睡同音なれハ其臨終此相を表して没後文字を如睡と改めしなるへし欤
杉森稲荷社　新材木町ニあり　俗ニ當社あるを不崇と字す　社記云此神像を親道と字す
相馬の将門威を東國ニ逞しうせし頃藤原秀郷朝敵誅伐
の計策を廻らし此御神の加護ニ依て遂に将門を亡しくめ

杉森稲荷神社
すぎのもりいなり
白狐神
本社
神主
神輿蔵

後靈夢を感し此地に至り穢くしたる杉の森あり地に崇め祀る
當社寛正の頃東國大に旱魃せし太田道灌江戸城にありて深く
是を憂とし此御神に祷るに其驗ありて雨降て百穀大に
登る依て其頃山城國稲荷山を摸して伍社の御神を勸請ある
事なりとなん毎年四月十六日祭奠神主小針氏奉祀す 當社始ハ町屋の後
園にありて參詣の道さへなかりしに元禄十六年本多彈正少弼忠晴寺社の
奉行たりし時社へ參詣の道を開きあたへられり菊岡沾凉云此ハ昔杉の木
立いと深かりしとなり又此地の或古老の話に寛文の頃此地ハ小針孫右衛門とよべる
商戸の地ゆかしく彼宅地にあらまし稲荷の祠なりしを其後延寶七年五月二十九日
此辺火災に依て焦土となりし頃此祠の現然と残りしハ諸人皆是を奇とし
吉川氏某深く信仰して新に姪子と姫太神とを相殿に祀ると云又或人云長谷
川町旧名を祢宜町と云昔當社の鞭くかりし時祢宜の住し所ゆゑかく号る
とされとも此説信しかたし

歌舞妓芝居 堺町葺屋町にあり 木挽町 寛永元年甲子の春中村
勘三郎 堺町狂言座元の始祖なり初道順と号す 昔禁闕及ひ營中に
於ても猿若の狂言をなし又ハ官船安宅丸を大江戸の川口へ入津の
時綱引の音頭を謳ひしかハ猿若の衣装及ひ御褒賞として金
麾かくひに猿若狂言の衣装及ひ簾の揚幕等今猶其家に傳へて重宝とす
名と又上京せし時勘三郎か中村座と規模を賜りし 官府の免許を蒙り

江戸中橋に於て始て太鼓櫓を揚猿若狂言尽しの芝居を興行
す 是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子とよへる韓紙に寛永より前ハ芝居ハ田舎にありと記せしハ柴井町の事を云なるへし扨披に芝居ありし所ハ志らかし町
後世に至て芝居を柴井に書改めたるなるへし又江戸名所記に芝居町より中橋へうつり又堺町へ引移したる事を挙たり事跡合考に寛永元年日本橋の西河岸町に芝居を取建るとあり可考寛永十八年の印行のそろ
物語といへる冊子に中橋ちかく米島丹後守哥舞妓ありと高札を建たりまて
貴賤群集 同九年壬申中橋より祢宜町へ引遂に慶安四年
辛卯今の地に移る 祢宜町といふハ今の長谷川町のうちなり今俗に此所を人形町と字するハ人形屋多く住かたに志ろ唱へたり
寛永二十年印本吾嬬めぐりといへるものに祢宜町に左近とよべる哥舞妓芝居
又角力手外薩摩太夫虎屋か操土佐か能などありたる由かく賑しき
趣を挙 又寛永十一年甲戌村山又三郎といふ者 此又三郎といへるハ名を獲屋山三郎の
弟子村山又左衛門の子村山 泉州堺より此地に下り公許を得て常
又八とよべる者の次男なりといふ
芝居を興行し能の狂言をうつし役者をまじへ舞子六人に勤
しむ 市村羽左衛門座 是なり 葺屋町狂言座元の興起なり二代目を竹之丞といふ
勘三郎の門弟なり寛文四年に至り始て續狂言を工夫し 堺町狂言座元 二代目明石
道具建を放流ふ其頃市村座を大芝居と称しよりしとあり 引幕其後萬治
三年庚子森田太郎兵衛といへる者是も官府の免許により

堺町
葺屋町
戯場
さかひ町
中村座
市村座
ふきや町

猿若狂言之古圖

木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎といへる者の二男又七といへるを養子とし名を森田勘弥と改む 木挽町狂言座元なり 同巻木挽町の下に詳へ 其餘堺町葺屋町の間に操座木偶芝居ありて四時に賑ひへり 元禄開校の江戸鹿子に堺町葺屋町の二丁ハ古へより操見せ物又ハ狂言尽しあるひハ放下の品玉縄切の曲を業とする者とも寄あつまり終日観示をなすの地なりとあり又江戸名所ちらしに江戸大薩摩土佐の太夫和泉太夫浄瑠理天満八太夫江戸孫四郎江戸半太夫ら説経鶴屋源太郎ら南京あやつりなとさまへの見せ物ありしことを志るせり

吉原町舊地 和泉町高砂町住吉町難波町等其舊地なり 住吉町難波町等の河岸を竃河岸と字するハ竃屋多きかの俗称なり此所の小溝ハ則ち昔の曲輪の外堀なりと云 慶長十七年庄司甚右衛門といへる者街を一所に定められ度旨 官府に訴へ奉りしかハ初て此地を賜はり花街とす往時慶長の頃迄ハ江戸に定まりたる傾城町もなく二軒三軒つゝかしこに散在せしを其中軒を並へたりしハ麹町八丁目なる十四五軒ありて何れも京六条より遷る又鎌倉河岸なる十四五軒大橋柳町なる廿軒ありしと云 此大橋と云ハ今の常盤橋なりしと 柳町と云ハ道三河岸の辺といふ 此柳町へハ駿府弥勒町より移りし其外伏見夷町奈良木辻等よりも追々大江戸に移りぬ慶長十一年の頃柳町の地ハ召上られ元誓願寺前へ引移られしか傾城屋とも打寄相談の上場所取立度由願られとも御免なかりしに庄司甚右衛門初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃仰付元和三年霜月地形普請出来て商賣せり江戸町一丁目ハ御一統の後初て開基せしゆゑかく号け同二丁目ハ鎌倉河岸より引京町一丁目ハ麹町より引同二丁目ハ追々に来りし上方の傾城屋を置きし一両年かして普請悉く成就せしかハ新町と名付しより角町ハ京橋角町よりうつりし寛永三年に至り五町全く家居落成しく此に移せしを然に明暦二年浅草の後今の地へ遷さるへきを申さるゝといへとも明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火に焼亡す依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移る

大門通
昔此地に吉原町ありし頃の大門の通りありしよりかく名つく今ハ銅物屋馬具師多く住り
菊屋

普請の間今戸鳥越山谷の間に借宅して渡世せしが
ゆるされたる花街今は舊地に在るは戯場相接し滋繁昌を極むべ
けれども祝融の祟ありしのちはしばしば彼地へ移されしも
おほやけの御恵いと有難き事なりけり

第六巻新吉原町の条下に詳なり

按に哥舞妓ハ其始遊女より出たる名にして奇ひ舞の妓女なりといへる
略語なり昔ハ高貴の人に愛せられし故にたまたま長門守丹後守
杯と呼なりしが遊女おほひ哥舞妓役者に太夫の称を授しと
いふあり故に今狂言座元を太夫元と唱へ若女形の藝に長じたるを太夫と
呼なるも其余風なるべしされど今大江戸にハ遊女は太夫の称なくして
寛永十八年の比よりそろそろ物語といふものまでの吉原町の奇舞妓女を愛
させられたりを明けくれ中にも佐渡島正吉村山左近國本織部北野小太夫出来島
長門守杉山主殿米島丹後守なとといひて名を得し遊女あり是等ハ一座の
かしらなく其頃奇舞妓ふくく和尚と称せしとぞ又日を重ね洲町繁昌せしと
町割をなし本町堺町京町江戸町伏見町堺町大坂町墨町新町揚と名付て家を
居美しく軒をならべ草の夜家をおくらめとも杖に作まく又本町を中に
こまく其ひくりに揚屋町を置き幾筋ともなく横町をつくりき能奇舞妓の舞
臺をこしらひ置ひとつに與へしる由記せり又江戸名所記にも遊女等
芝居とかまへ奇舞妓をなせしに皆人めでまどひけり世のさまたげともなりければ
是を禁ぜられし其後ハ若衆奇舞妓と云ふを與へありしかりしき
少年に奇舞をなさせしとぞ

賀茂真淵翁閑居地　濱町にあり　宝暦十四年此地へうつり住　家集にみえたり　真淵翁一に

岡部衛士又ハ縣居とも称せり賀茂縣主成助の末葉にして世々洛北
賀茂大神の宮司たり同師朝の時文永十一年甲戌遠州濱松庄
岡部郷なる賀茂の新宮を斎まつるべき詔を蒙りて又彼地を賜はり
其宮の神主となりて即岡部郷に住せり翁ハ其後裔定信といへる人の
子なり元禄十一年丁丑彼地に生る壮より深く國朝の学に心ざし
はじめ享保十八年癸丑花洛に至りて荷田宿祢春満の教を受け後

荷田宿祢ハ本姓羽倉と称す此人ハ洛東稲荷社の祠官なり

大に國学を以て世に鳴る寛延三年
庚午大江戸に来りて田安の殿の召に應じ古への書の道の博士としてつかへ
特に愛させたまひ其頃御衣を賜はりしかバ其かしこまりに和哥を奉る

あなたふとわが大君の御衣を氏人のかづらむものと誰かしりけん

其後宝暦十年庚辰仕をかへし奉りて濱町に隠栖す翁を縣居
と唱ふるも庭を田居の様に作りしも賀茂氏の姓にも縁あれバ
とぞいへり家の号に呼れしとなり生涯の著述凡六十餘部其

新大橋(しんおほはし)
三派(みつまた)

山もありまつこ
船もとほり
川もありて
野もありと見ゆるこ
三川まつこの景

半井卜養

永代橋

門に入て教を受世に其名を聞ゆる者 本居宣長 橘千蔭 平春海 藤原宇万伎 揖取魚彦 及ひ倭文女等之家集

宝暦十四年の秋濱町といふ所へ家をうつしけるに庭を見へまはし畑に作りてなにくれとうゑて名をあつくなしひて住そめけるに九月十三夜に月見むとて来つる人々つとひて家によまれけるついてによめる

こよひこそ此宿やあかつきの秋宵に月かけ清しとふ人も哉

あかくねのちぬの露かすみけく明けにてらける都人うと

うちやま氏のもとより嵐の夜にかくひて折てしける
かへりことに秋は吹ちらしける色紙梅にこのきさく
やらむぬ

堅ひきしてあくらの宿はあれなりし月見にこよと従に告ましを

さきさく此のまゆつるいく女の君花をもしきる庭を
ちらるまつくれるうすく秋の花咲たりけり

来られは千葉も咲あけるに君来まさんと思ひけるかな

新大橋

両國橋より川下の方濱町より深川六間堀へ架す長九百八間あまり此橋は元禄六年癸酉始て是をかけらる両國橋の旧名を大橋と云故に其名によりて新大橋と号らるとなり

風羅袖日記 元禄五申年の冬深川大橋なかはかゝりけるとき

初雪やかけかゝりたる橋の上　芭蕉

同しく落成せし時

ありかたやいたゝいて踏はしの霜　仝

三汊

新大橋の下分流の所を云浅草川と箱崎の間の流との分れ流るゝ所なれはみつまたの名所なり

因に云此所を別れの淵と云又は汐と水との別れ流るゝ所なるゆへにいふ 明和八年辛卯中流を埋て人居とし中洲と称せり されと洪水の時便あしきとて寛政元酉年に至て復元のことくの川となる

堀立 昔は多く遊女奇舞妓の類ひこゝに船をうかへて宴を催し殊更月の夕は清光の隈なきを翫ひ酒に対して奇諷ひなんと甚賑しかりしとなり

江戸雀に諸國の大船殊に唐船此川にかゝる隈なき納涼の地なれは船遊ひの船に波のてゝ風のさゝら芦の葉の笛吹なりしと云々

三汊江泛舟　春臺

風静又江不起波　輕舟汎々酔中過　天遊只

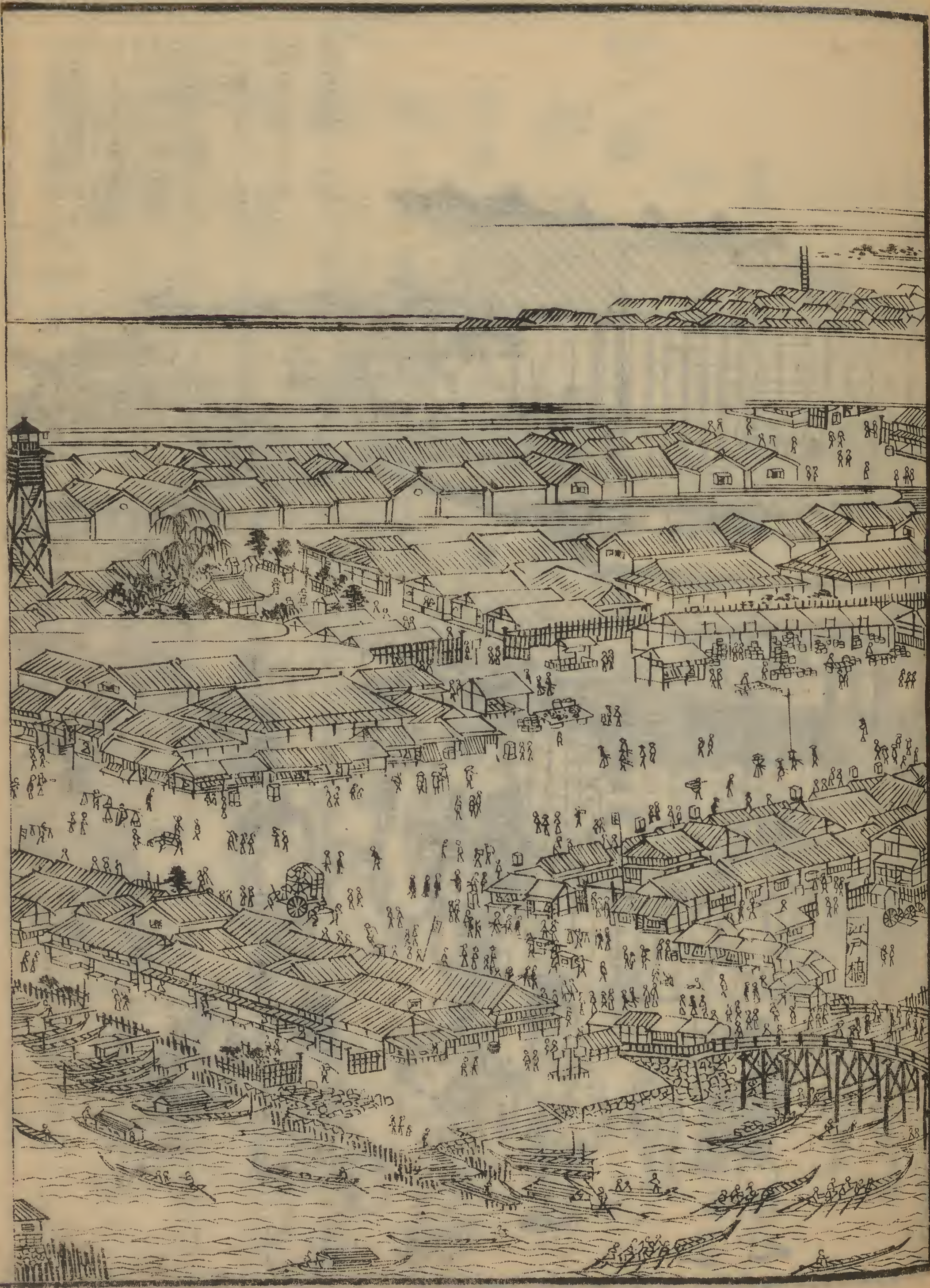
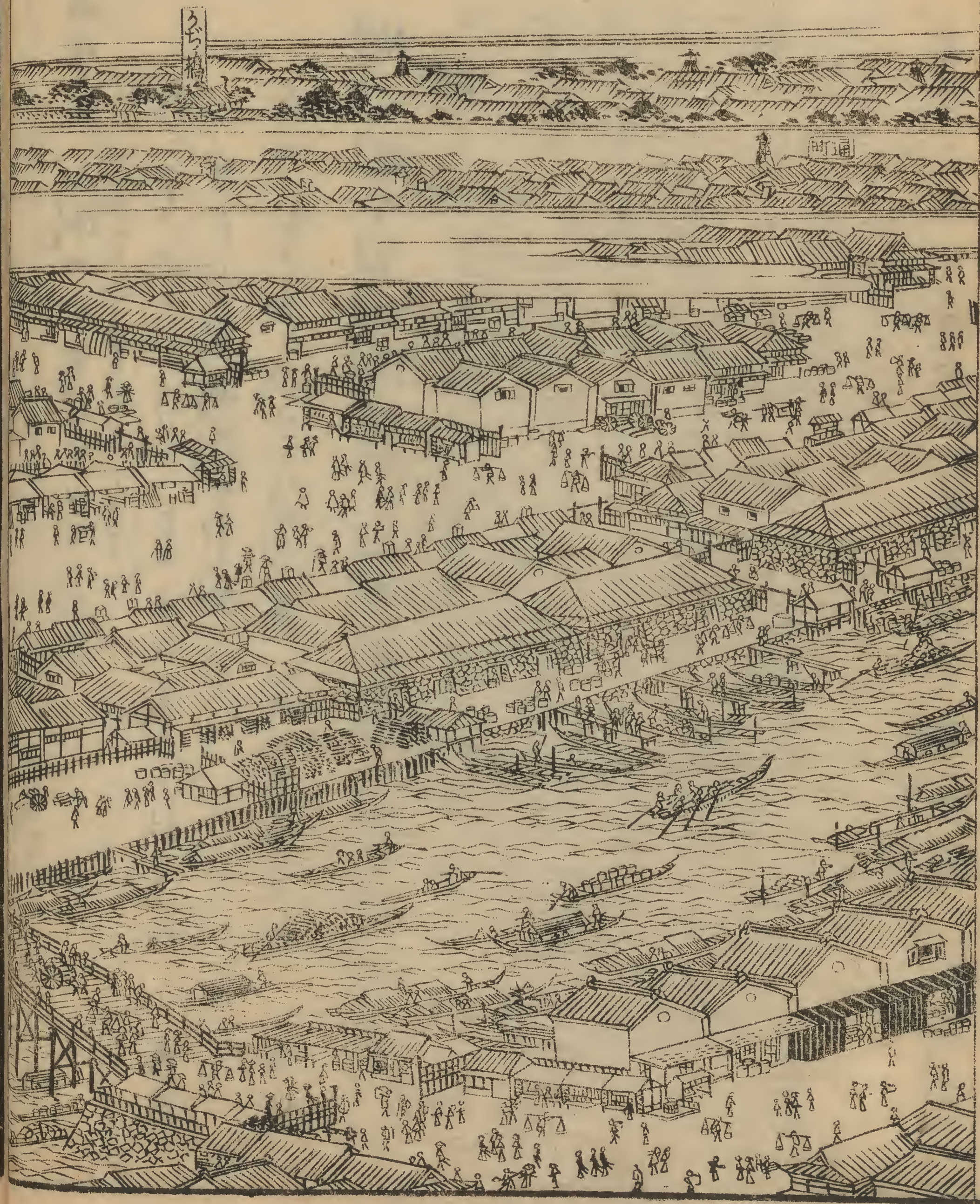
四日市（よつかいち）
よろい橋
通町
江戸橋

在人間外　長嘯高吟雑棹歌

人ゝにとられつまてく八月の十六夜三河に歳を
うらく賤んたつりしに彩渺に才蔵妓子の
年十六なりといへり

美しき人も二八の十六秋月とるハまくあるものなれい　卜養

宿もありまく舟もあり川もひろき粉ハひと桝くろつ男も来　仝

江戸橋　日本橋の東にありて伊勢町より本材木町へ行間に架る南の橋詰巽の角に船宿ありて江戸の内諸方への船場あり又同所西の方木更津河岸と字も房州木更津渡海往還の船ここに集る故に名とす

四日市　江戸橋と日本橋の間川より南の方の大路を云昔ハ四日市場とのひし村なりしといふ今の繁華のめざましきなれハ萬の貨物も市をなして交易せられハ得たりし故にこゝに其日市を立る区を名つけて某日市と云羽州のあたりにハ二日市と云より十日市と云迄区の名に残りて交易せり此地も昔ハ毎月四の日に

中橋（なかばし）
御料理
即席

市を立し所なりとぞ故に今も其遺風ありて草物又ハ野菜の類ひ其余乾魚なとの市ありて繁昌の地なり此地に根津権現の御旅所あり　正徳年中に造営ありとぞ　同所河岸に傍て封疆蔵あり下より石を以て畳揚上に家根を覆ふ　明暦開板のむさしあぶみといへる草紙に日本橋の南萬町より四日市迄の町屋を取除け高さ四間に川端にそふて北をうけ東西二町半に土手蔵を畳あけらると云々今ま霊岸島に四日市となる町家あるを此所より引うつされたり

祇園會旅所

南傳馬町一丁目と二丁目の間の辻にあり本社ハ神田明神の地にあり祭所素盞嗚尊にして是を大政所と称せり毎年六月七日ここに神幸ありて同十四日帰輿し奉る其間参詣多く甚にぎはへり

鎧の渡

茅場町牧野家の後を云此所より小網町への舟渡をかく唱へしハ往古ハ大江なりしとなり里諺に云永承年間源義家朝臣奥州征伐の時此所より下總國に渡らんとせし時に

鎧之渡（よろひのわたし）

暴風吹發て逆浪天を浸し既に其船覆らんとせし義家朝臣鎧一領をとりて海中に投し龍神に手向て風波の難をのがれしめ給ふ事を祈請も遂に恙なく下總國に着岸ありしより此所を鎧が淵と呼へりとなり 元禄開板の江戸鹿子に平将門此所に兜鎧を置兜ハ塚に築く牧野侯の庭中にありと記せり

兜塚 同所海賊橋の東詰牧野家の庭中にあり源義家朝臣奥州征伐凱陣のとき先の報賽のため且ハ東夷鎮護の為として日本武尊の古き例に準ひ自の兜を一堆の塚に築き篭給ひしとなり今其傍に義家朝臣の靈を鎮祭る小祠あり 紫の一本といへる双紙に甲山とありて藤原秀郷平将門を討其首を冑と共に持添きたりしが冑をハ此地に埋めけるとあり

永田馬場山王御旅所 茅場町にあり遥拝の社二宇並ひ建り 寛永年間此地を山王の御旅所に定らるといへり 一宇ハ神主樹下氏持 一宇ハ別當觀理院持し 隔年六月十五日御祭礼ゆへ永田馬場の御本社より神輿三基此所に神幸あり假に神殿を備け供御を献備し別當ハ法樂を捧け神主ハ奉幣の式を行ひ夜に入て帰輿なり其行装榊大幣菅蓋錦蓋雲のごとく社司社僧ハ騎馬に跨り或ハ輿に乗し前後に扈従せり諸侯よりハ神馬長柄鎗等を出されて途中の供奉嚴重なり又氏子の町〻よりハ思ひ〱に練物あるひハ花屋臺車樂等に錦爛純子杯のまん幕を打まハし各手出立花やかに羅綾の袂錦繍の裔をひるかへし粧ひ巍〻堂〻として善美を尽せり 此日官府の御沙汰として神輿通行の御道筋ハ横の小路〻ハ矢来を結ハし総て往来を禁せらるゝ実に大江戸第一の大祀にして一時の壮観なり

薬師堂 同く御旅所の地にあり本尊薬師如来ハ恵心僧都の作なり 山王権現の本地佛なるゆゑに慈眼大師勧請し給ふといへり縁日ハ毎月八日十二日 正五九月廿日中開帳あり ゆゑに門前二三町の間植木の

六月十五日
山王祭（さんわうまつり）

一家ホもて天下まつりや出車
其角

其二
薬師堂
山王御祭禮
山王御祭禮
山王御祭禮
山王御祭禮
奉納山王御祭禮

其三
湊橋
奉獻御祭禮
奉獻御祭禮
山王御祭禮

永田馬場
山王御旅所
六月十五日
御祭礼の
時此所へ
神輿行幸
あり
山王宮
茅場町
薬師堂

毎月八日十二日薬師の縁日には植木を商ふもの夥しく来詣群集して賑へり
夕やくし
まくしきて風の
藝うり
其角

市立す別當ハ醫王山智泉院と号を（元ハ鎧島山と号けしとかや）本尊縁起曰
恵心僧都ハ其父母大和國高尾寺の薬師佛に祷りて設くる
所の靈児なり僧都佛門に入りて後法恩を謝せんが為自ら此本
尊を彫刻ありて高尾寺に安置せられしが遙の後相州大場
村に遷しまゐらせ然るに慈眼大師東叡山にうつし奉る此地や
大城の東に位しあれも山王の本地佛なりとて安置ありし
ものならんとなり

天満宮 同境内にあり社司諸井氏奉祀を（二月八月共に廿五日を祭日とす）神像ハ画幅にして寛永年間柳営に奉仕の春日局 大樹より拜受せられしを山王の神主日吉右京進へ附与ありその後諸井氏請得てここに勧請すといへりとなり

類柑子　北の窓

我栖北隣に芦荻茂く生しげく笹阿なる地あり茅場町といふ名に呼れて昔ハ海邊なりしを今ハ栄行家作りしてえんまう法師と定め薬師佛立まへる堂のかたへに
たゞほのかに絵にかゝるとまんゆう蛙なき水をたゝへて池あり
深草に引人しあれば蓼の花穂に立のし茅木
色つきけるも風につけても虫の聲咲まさるを大ての北
窓もうつなるに持にかなしん出る月の影をことさらし
窓にふるゝ中明めつし　中略　ゆふらくも稀にて炎夏をいつ
りかけす常林叢子に這かゝく蛍をかぞへつゝもさびしさ
なし娘の四つたくつるもあるあつあつく婦とさしまくとらん
とまりあやまちもなし　さハ切りぬ　ものによりて影と
無そぞろすゝろも　下略

俳仙宝晋齋其角翁宿　茅場町薬師堂の辺也といへし待ふ元禄の
末ころに住せ即後馬の地なり
按に梅が香や隣ハ荻生惣右衛門といふ句ハ其角翁のよみし句にて普く人口に
膾炙せし依て世の人其句をしるといへども茲に注して其居宅の間近きを知るの一助とせんのみ

祖徠先生居宅地　同所植木店なりといふ先生一号を蘐園といはれし

伊雑大神宮（いそへだいじんぐう）
勧進聖判職人尽〻
歌合の内花と獅子舞
たそかれく
春のあけに
まふ獅子の
たゝく鼓に
花も咲そへ
道遥院
平田屋

蘐ハ萱と同し字義なれバ称せられしなりよりて此地に住せられしも知るべし

伊雜太神宮　北八町堀松屋橋より一町ばかり艮の方塗師町代地町屋の間にあるを　當社ある故に此所を字して磯辺横町と呼へり　土俗磯辺太神宮といふ
伊雜の御神ハ天照皇太神宮の別宮にして祭神ハ伊佐波登美命と玉柱屋姫命二座なり寛永元年甲子伊勢長官出口市正某伊雜宮より移しまゐらせ通三丁目に宮社を営めり　今神明長屋と唱ふる八則是之　同十年癸酉今の地へ移しまゐらせ例祭ハ六月廿六日に修行す

三ツ橋　一ツ所に橋を三所架せし故に然呼ぶ北八町堀より本材木町八丁目へ渡るを彈正橋と呼び　寛永の頃今の松屋町の角に島田彈正少弼やしきありし故といふ　本材木町より白魚屋鋪へ渡るを牛の草橋といふ又白魚屋敷より南八町堀へ架せるを真福寺橋と号るなり

靈巖島　箱崎の南にあり　町数今十八町斗あり　昔雄誉靈巖和尚此地の海汀を築立て梵宮を営て靈巖寺と号く　依て後世靈巖島と地名起れり初ハ江戸の中島とよびしとあり　東海道名所記にまたいん島も江戸の地をはなれて東の海中へ築出したる島なりと云云　本　後世寺を深川へ移されたる其跡を町家となしたるをいへり故に此地の北の通りより茅場町へ渡る橋を灵岸橋と号けたり

隨見屋鋪　同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地なりといへるを　此所に瀬戸物屋多く住せり故に茶碗鉢店とも号く或随見長屋ともよべり　川村随見ハ諸國の水土を考ふるに精しかりしが大に世に勲功ある海を築き川を堀田畑を開発を河内國の水を落さんとして摂泉の堺に大和川を堀淀川の溢を治んとして大坂に安治川を鑿　随見自らの実名を安治といふ説に安治川と云とぞ　其土砂を以て川下に新に山を築き洪水の時高波を防除かむるを志るとし且沖よりの目當とす　世に随見山と称せり本名ハ波除山といへり　其餘の功最少からず　菊岡沾凉云く川村随見ハ御幕下川村氏の始祖なりと云く

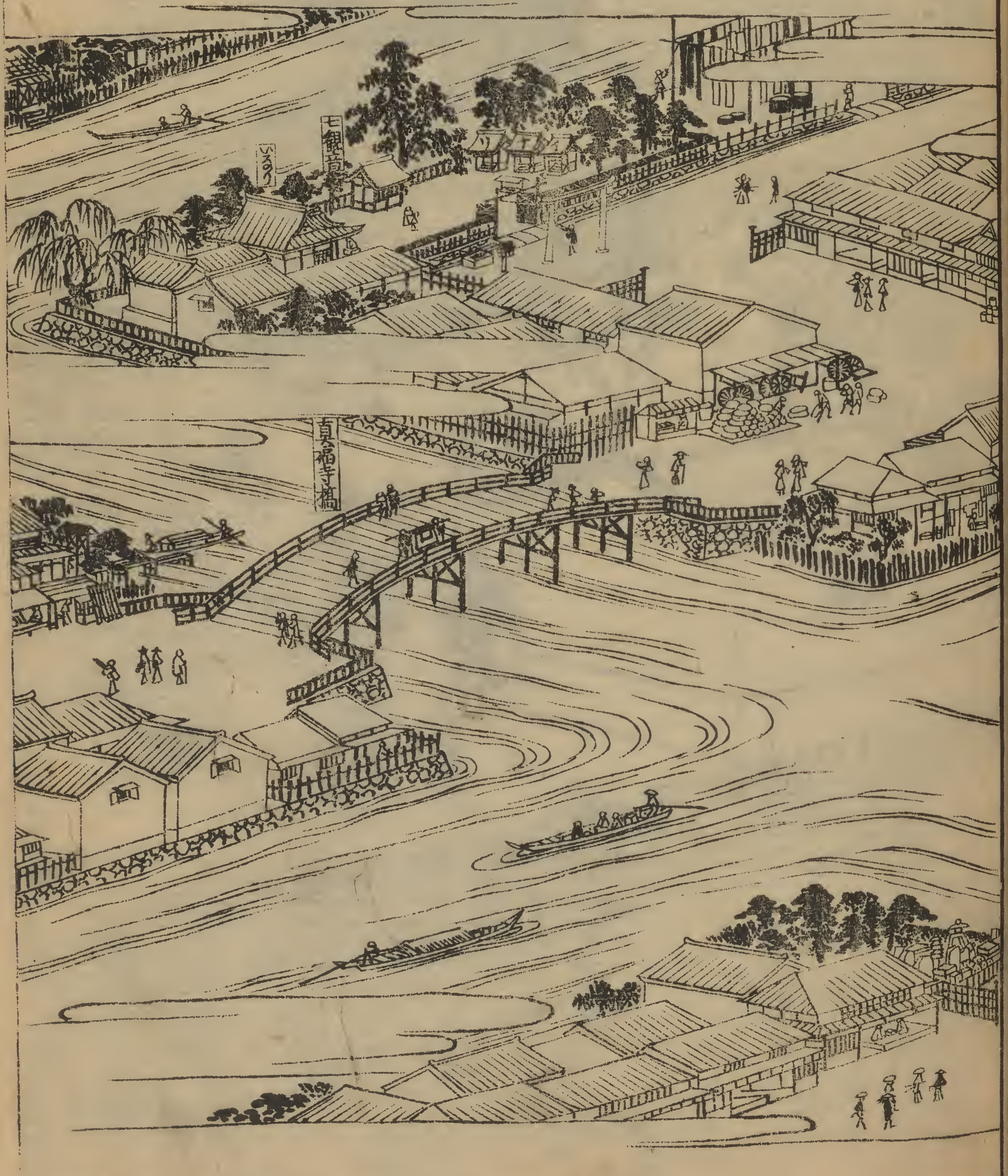
三ツ橋（みつはし）

風羅袖日記
八丁堀にて
菜の花のさくや石屋の石の間
芭蕉

新川酒問屋

新川大神宮
しんかわだいじんぐう
何の木の花とも知らず匂ひかな
芭蕉
拝殿
牛頭天王
八百万神
冨士
大神
三峯
弁天

伊勢太神宮 同所四日市町にあり此地の産土神とも唱ふ 此所を俗間に新川と唱ふ酒問屋夥く

ありしく繁昌の地なり 伊勢内外両皇太神宮を勧請し奉り遥拝所とも遷宮伊勢と同年なり 江戸鹿子にハ寛永中草創とあり 伊勢内宮の社僧慶光院比丘尼江戸参府の折柄旅亭の儲の為に此地をあふとぞ 慶光院伊勢上人ハ格式の時

御門跡並に比せられ紫衣を賜りしく御朱印地なり始祖の比丘尼ハ内宮建立の時より連綿としく社僧たり依て内宮の法師山本太夫ハ始祖慶光院の子孫なるよし今も彼寺の住持比丘尼八代くこの家より嗣続るしとなり

按に明暦の江戸繪図に今所謂三の御丸の地に伊勢上人の屋舗と志るせし所あり此上人の旅宿なるへし後に此所へ迂させられしなるらん

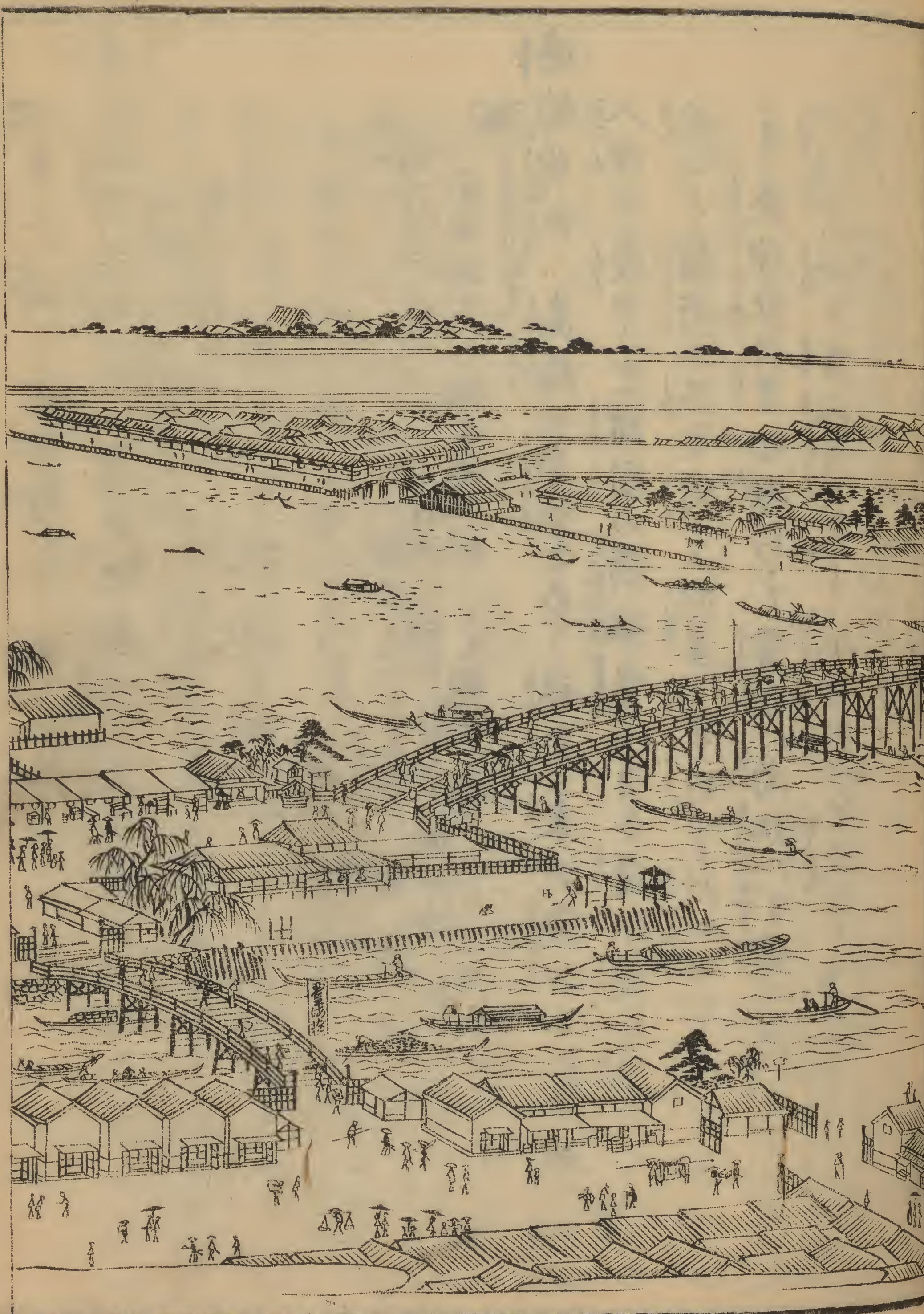
年山紀聞云

永禄元年日記 記者不詳 後六月三日中山亜相 神官ノ伝奏 被談云ク去月廿三日神官訴上棟無之令沙汰之由注進有之或比丘尼号上人 先皇時代有上人号女房初例歟 名号慶光院以諸国勧進之力此上棟取立者之内、又内宮上棟存立ト云云 雖不相応之事世以此之傚神慮有子細哉不測知之事也

永代橋 箱崎より深川佐賀町に掛る元禄十一年戊寅始て是を架せしめらる永代島に架するゆゑに名とす長凡百十間餘あり此所ハ諸國への廻船輻湊の要津なれバ橋上至て高し 此橋の架ら己前ハ深川の大渡をもつて船渡しありしとなり 東南ハ蒼海ゆうくし房総の翠巒斜に開け芙蓉の白峯ハ大城の西に峙ち筑波の遠嶺ハ墨水に臨むて朦朧たるも台嶺金龍の宝閣ハ緑樹の蔭に見えかくれて自丹青を施すよ似て風光さながら画中にあるがごとし

薬師堂 霊巌島銀町にあり別當ハ真言宗にして医王山圓覚寺と号す本尊ハ三州鳳来寺峯の薬師と同木同作にして大宝年間に造立ありしとあり 座像御丈三尺あり鳳来寺薬師と称し又ハ橋本薬師とも称せり 理趣仙人刻む所のもの 此霊像ハもと高野山橋本の里にありしを慶長年間當寺の開基惠生阿闍梨此地に迂し後霊巌寺の境内に安す 深川霊巌寺の地なり彼寺始萬治の後霊巌寺深川にうつる其頃此薬師堂と此地にあり稲荷の社のミを此地に残しとゞめらるゝといへり

橋本稲荷社 同境内にあり此所の鎮守にして社記云神像ハ弘法大師の作にして 御丈一尺二寸あり 山城國伏見稲荷明神と同木同作なりとぞり往古高野山の麓橋本の里に宮居を造りて安置ありしを

永代橋（えいたいばし）
東望天邊海氣高
三叉口上接滔々
布帆一片懸秋色
欲破長風萬里濤
南郭

故ありて後ここに勧請なし奉るとなり

恵比須前稲荷祠　同所東湊町の南高橋の北詰人家の間に
あり　別當ハ天台宗にして普門院と号す　昔ハ向井侯のやしきにありし海賊橋より
引移られし頃宮居を構の外に出されしより此所をゑびす社
宮前又ハ蛭子前と唱へきたれり　古老云く昔此地より鉄炮洲築地へ一圓の海なりし頃ハ此所彼所に
出洲のありし此辺の洲に芝海老といへるもの多く集る故に漁人字してえびの洲
と唱へ其洲崎にありし稲荷の宮なるをもて海老洲の宮とのみよびならハせ
しを後世誤りて蛭子神に混じ又夷子に轉じいよいよ附會せしなりとぞこの
説さもありなんかし

湊稲荷社　高橋の南詰にあり　鎮座の来由詳ならず　此地ハ廻船
入津の湊にして諸國の商船普くここに運び碇を下して此社の
前なる積所の品を悉く問屋へ運送す此故にや近世吉田家
より湊神社の号を贈られて當社ハ南北八丁堀の産土神なり又
此川口の北に監船所ありて船の出入を改らる　事蹟合考云此祠昔ハ八丁堀一丁目の南岸に
ありしが此地年月を重ねて家居立つゞき
されハ八丁目の端に遷せしとぞ

鉄炮洲　南北へ凡八町ありしもあつぱし傳云寛永の頃井上稲冨等
大筒の町見を試し所なりと或此出洲の形状其器に似たる故の
号なりとも云へり　白石先生の説に此地ハ明暦火災後に桒山伊賀守某を
奉行として築出されしとなり又故家珍蔵の舊圖に新
出洲と記せり　今ハ薪炭石灰の問屋多く住せり

すめる月ハ世界の鉄炮洲あのまのまで雲を払んぬく　半井卜養

半井卜養翁居宅地　同所明石町の裏通にあり　或人云延宝九年江戸図に半井卜仙拝領屋敷とあり半井卜養翁ハ
敷ハ父卜養の時賜りしなりと云ふ寛文江戸繪圖に十間町の
西の裏通り寒さ橋の東詰の北の方川に傍る角に記してあり
東都の御醫官にして牡丹花肖柏の裔孫なり連哥をよくし
狂歌を能せる此地を賜りし頃の口ずさみに

卜養ハ本道とこそ思ひしにてつぱうずにて外科りをる
按に江戸砂子に卜養の詠とあれど哥意ハ他の人の詠るが如く不審なりし

了然禅尼菴室地　此地に住まへりしよし紫の一本といへる草紙に
見えたり禅尼の行實ハ第四巻落合泰雲寺の条下に詳なり

佃島（つくだしま）　鉄炮洲に傍たる孤島をいふ（舟松町より舟渡ありてこゝに至る）文亀年間江戸の舊圖に向島とあり天正年間
東照大神君遠州濱松の御城にましく皇都へ上りたまふ頃摂津國多田の御廟および住吉大神にまうでたまひし神崎川御船なかりしに佃村の漁父漁船をさし出して渡し奉りしかば伏見
御城にましく時も御膳の魚を奉るべき旨　台命あり又西國へ御使なとの折からはかならず漁船を以て仕へ奉るべき旨　命ありしかば大坂両度の御陣にも軍吏の密使或は御膳の魚猟等のために日々怠なく仕へ奉りしかば其後漁人三十四人江戸へめされ慶長年間浅草川御遊猟の時網を引せたまひ同十八年八月十日海川漁猟すべき旨免許なしたまへり（其頃迄は安藤石川両侯の藩邸ありし）（貞享の頃は今の小石川網干坂小網町難波町ホに旅宿して居りしとありしが　難波町は今の六人川岸と云所なりとぞ六人網と号けて献上物の用を勤るとあり）然るに寛永年間鉄炮洲の東の干潟百間四方の地をたまはり正保元年二月漁家を立並べて本國佃村の名を採て即佃島と号く又白魚を取て奉るべき旨　台命によりて毎年十一月より三月迄怠らず奉る其間は他の猟を堅く禁めたまへり猶其後深川八幡宮の前なる空地三十坪をたまはりて佃町と号けられ御菜魚をも奉れることゝなれり（或人の説に此所は始安藤右京進やしきの地なりしく住吉の社頭に繁茂せる藤は安藤家にて栽られしなりといへり）（廣貢に佃島は紀州賀多の漁人雑居し一島皆本願寺宗にて他宗なしと云く）此地は殊更白魚に名あり故に冬月の間毎夜漁舟に篝火を焼四手網を以て是を漁れり都下にありて是を賞せり春に至ては二月の末よりは川上に登る弥生の頃子を産其子秋に至て七八月の頃江海に入と云（事蹟合考に云両國の川筋に産する所の白魚は尾州名古屋の浦よりとりよせ放つと云く）

住吉明神社　佃島にあり祭る神摂州の住吉の御神に同し神主は平岡氏奉祀せり正保年間摂州佃の漁民に初て此地を賜はりしよりこゝに移り住本國の産土神なる故に分社して祭りしを

佃島
住吉明神社
名月や
こゝ住吉の
つくだ嶋
其角
安房
上総
佃島
住吉

其二

湊稲荷社

冨士

永代橋

いなり橋

佃島(つくだしま)白魚網(しらうをあみ)

住吉の宮居を建立せしとかなり　摂州の佃村ハ西成郡にあり古今集また島とよめる是なりかしこに
住吉明神の宮居ありて神功皇后三韓征伐御帰陣の時其地に御船の艫綱を
うけ給ひしより已降佃村の地に御船の鬼板を佃へいつき祭る事千有余年に及りと
いへり当社ハ毎歳六月晦日名越祓修行あり　例祭ハ毎歳六月廿八日廿九日
此分社なり　両日なり人ゝ群集す

道遥院実隆公住吉法納和哥十首の題を詠てまつりし中に

江上月

此浦の入江の松に月のみなれそあらそく秋のくもむ　冨茂睡

名月やこゝ住吉のつくたしま　其角

此地ハ都下を去る事咫尺なりといへとも離島にして漁人の住家のミ
所得顔なり弥生の潮乾には貴賤袖を交へて浦風に酔を醒し
貝拾ひあるは磯菜摘なんと其興殊に多し月平沙を照しては
漁火白く芦辺の水雞波間の千鳥も共に此地の景色に入りては
時の風光筆紙もつくすへうもなし

鎧島

佃島の北に並へり今石川島と号く　俗に八右衛門島といへり昔大猷公の御時石川八左衛門の先代此島を拝領せしより人ゝ八右衛門島と唱ふとなり寛政四年石川氏旧名を森島と云ふ江戸の神田町へ屋敷替ありしより炭置場人足寄場にかはれり

古図にハえいくり　古図 文亀　又其図に記て云く此島一名を鎧島と号く
古へ八幡太郎義家朝臣鎧を収めて神體とし八幡宮を勧請
す石川大隅守居住の時ハ其庭中にありしか今ハ鉄炮洲稲荷
境内にありと云云　或人云昔
是を庁前に持て　大樹の御前へ披露なし奉る重くして是を持ものなかりし時石川氏の祖大力ありけれハ
宅地にたまはりてなり鎧を携へし賞としてかの地を御感賞のあまり此地を鎧島とハ号け

江風山月楼　築地稲葉侯別荘の号なり寛文二年壬寅の春此所
の海汀を填ミ土を積石を畳むて翌る年の秋其功なりしと
いふ風光他に勝れ殊に洞庭の秋影ゆかを越ゆるとなり

咳逆着嫗　同藩中にありいつまてもなくさ二尺ばかりの石像なり稲葉侯の始
祖小田原にありし時当辺を巡見せられしにかたはらの深山にふ
一の草庵に一人の老僧の住るあり号を風外と云と後是を城中に請ぜんとする
事度なりし故に其後一度城に入来て城主に見ゆるといへともあくまで
受る所の種ハ其家臣田崎某か許に置て出去終に行方をしらすとなり其住る
所の庵に件の石像を残してありしを後此地にうつされけるとなり　されと着嫗とも
伝へ人あるかしれとも伝へ云此着嫗の石像を一雙並へ置時ハかならす着の石像倒
るゝのありしとそ依て着の石像を稲葉侯累代の牌堂に遷し嫗の石像ハ稲荷社前に
置となり又着の石像ハ口中に痛あるものの寄願し嫗の石像ハ咳を愈すとの祢

寒橋（さむさばし）
西本願寺
青海や
浅黄
ふりさく
秋の
くれ
其角

西本願寺
本堂
鐘楼
唐門
太鼓楼
玄関

願ひをかくるに霊驗ありといへり

西本願寺　同所川を隔て北の方にあり俗に築地の門跡とよふ　或人云此地ハ明暦四年に仰のるあつかる築所なりといへとも　一向派かしらく京都西六條より輪番所なり　宗派のしるし題を表方といへり　塔頭五十七宇あり始横山町二丁目の南側裏通りふかのしを明暦大火の後此地に移さる准如上人を當寺の開祖とも　江戸名所記に神祖御在世の時より京都西本願寺の末寺を立られ宗流を汲輩を御ゆるしありと云く白石先生云く潮養寺といふ一向僧東本願寺の建立をゆるさく公へ願ひて立ゝ所ありとぞ和漢年契に延宝八年庚申西本願寺立とあり　本尊阿弥陀如来ハ聖徳太子の彫像なりとし泉州堺の信證院よりうつす毎年七月七日立花會十一月廿八日開山忌にて七昼夜の法會修行あり是を報恩講と云又俗に御講と称を　塔中成勝院に俳仙杉風翁の墳墓あり

釆女ヶ原　木挽町四丁目より東の方此所に馬場あり常に賑しく講釈師浄瑠璃のたくひ軒を並へて行人の足をとゝむ享保九年迄此地に松平釆女正定基のやしきあり[illegible]となり同年正月晦日

采女ヶ原
西本願寺
万年橋

魚ふせや
一ばん太鼓
二番鳥
木挽町芝居

新橋
汐留橋
松坂屋

尾張町
布袋屋
亀屋
恵比須屋
呉服店

金六町（きんろくちやう）
しからき
茶店（さてん）

火災の後やしきハ麹町三丁目の裏へうつされ同十二年の頃其跡へ新に馬場を開かるゝこととなる　馬場の地ハ天明五年今の芝西應寺町その代地となり町屋の地馬場なりし
此所の井を釆女の井とよぶも彼やしきの用水なりし故に名づくるなり

歌舞妓芝居　木挽町五丁目にあり今森田勘弥の歌舞妓芝居綿〻としく相續す　芝居の基原ハ堺町葺屋町の条下に詳なり　昔ハ此所六丁目に山村長太夫とのひし名代の狂言座ありしく中村市村森田等の芝居とあハせてまへく四座ありしを正徳四年の頃故ありて此芝居を止めらる　山村長太夫座ハ初めハ岡村長兵衛と云実子なくして徒子七十郎といへるを養て子とす二代岡村五郎左衛門是なり後に名を改て山村長太夫といふ是も男子のなかりしかハ聟をとりて相續す此時に至りて断絶せしなり此芝居ハ正保元年申歳に始るとそ東海道名所記に木挽町に喜太夫か浄瑠璃其外異類異形のものをつくせるからくりあり　昔ハ狂言座の外にみせ物のるいあまたありし

織田有楽齋第宅地　元数寄屋町の地なりと云慶長の頃此地を織田有楽齋に賜りしか後ハ空地となりて三四丁か程芝生となり春ハ摘草夏ハ池水に涼をとりて其頃ハ林泉の形も残りて殊更櫻楓等の二樹多く春秋共に遊望の地なりし寛永の頃迄ハ折にふれて大樹此地に御遊獵なしたまはせられしとなり　有楽齋名長益源五郎と称す入道して如庵と号す法名…元和七年に卒す　有楽齋ハ信長公の弟にして茶道を利休居士に受て一家の風あり此人茶の湯に長ず故に宅地にいくつともなく数寄屋を建置れし旧跡なるをもつて後世土人数寄屋の唱をなしけるを町の名によびしとなり

新橋　大通り筋出雲町と芝口一丁目との間に係る正徳元年辛卯朝鮮人来聘の前宝永七年庚寅此所に新に御門を御造営ありしく芝口御門と唱へ橋の名も芝口橋と更られしか享保九年正月廿九日の火災に焼亡されし後ハ復旧の町家となされけり此川筋の東木挽町七丁目と芝口新町の間に架せしを汐留といふ

正徳四年
江戸圖

江戸名所圖會天樞之上畢